Dr Negishi's Assessment Clinic
評価クリニック

コミュニカティブ・テスティングへの挑戦

根岸 雅史 Negishi Masashi
（東京外国語大学）

1.『コミュニカティブ・テスティングへの挑戦』

この度，『コミュニカティブ・テスティングへの挑戦』(三省堂)という本が出版されることになった。そこで，少しこの本を紹介させていただきたい。この本の柱となっているのは，「東京都中学校英語教育研究会（都中英研，以下中英研と略す)」調査部の「英語コミュニケーションテスト」である。私がこのテスト作りに関わってから，10 年近くになる。

当初は，それぞれのテスティング・ポイントを明確にすること，テスト・デザインやスペック（test specifications）を作ることを強調したように思う。これらの重要性を先生方に理解していただくのにも，数年はかかった。しかし，これらがある程度理解されるようになると，今度は「コミュニケーション能力を測るテスト」を作りたいということになった。

中英研の先生方に「コミュニカティブ・テスティング」を仕掛けてみると，その反応には目を見張るものがあった。「コミュニカティブ・テスティング」作りは，きわめて創造的な活動である。ひとたび「コミュニカティブ・テスティング」という概念に触れると，先生方からはさまざまなアイディアが湧いてきた。そこには，本当におもしろいと思える問題がたくさんあった。きっと普段の授業も，ユニークなアイディアであふれているのだろう。そのアイディアが，「コミュニカティブ・テスティング」という概念に触れ，テストへと姿を変えていったのかもしれない。

2. コミュニカティブ・テスティングとは？

従来の英語のテストの多くは，現実のコミュニケーションとはかなり異なったものであったといえる。例えば，ライティング・テストでは，「あなたの好きなスポーツについて書きなさい」というような「自由作文」がよく出題されてきた。しかし，このような問題では，この文章を誰に向けて書くのかが明らかにされておらず，その文章を書く目的も不明である。現実の生活では，誰に読まれるかのあてもない文章を書いたりすることはまずないだろう。

これに対してコミュニカティブ・テスティングでは，真のコミュニケーション能力を測るために，なるべく現実的なコミュニケーションをテストの中で再現しようとしている。こうした本物らしさを「オーセンティシティー」というが，このオーセンティシティーには，「タスク」のオーセンティシティーと「テキスト（スクリプト)」のオーセンティシティーとがある。前者は，そのタスクが実際に生活で行われるようなタスクとなっているかという観点であり，後者はそのテキスト（スクリプト）が実際の生活で出くわすようなものとなっているかという観点である。上で述べた「あなたの好きなスポーツについて書きなさい」などという問題は，タスクのオーセンティシティーが低いことになる。

では，コミュニカティブなライティングのテストの実例を，上掲書から見てみよう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アメリカに帰国することになった Jill（ジル）先生にクラスで色紙を作り，渡すことにしました。解答欄の Hi, Jill. から Goodbye の間に，3 文以上の英文で書きなさい。ただし，全部で 10 語以上の語を使うこと。あなたの感謝の気持ちを伝えてください。

注：「.」や「,」，「?」は語数に数えません。
I have a book. は 4 語と数えます。

Hi, Jill. _____

_____

_____

Goodbye, XXXXX

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この問題では，どういう状況で，誰に向かって，何のために英文を書かなければならないかが明らかになっている。こうした問題であれば，状況が明確なため，どのようなことを書かなければならないかが自然と決まってくる。また，何の目的もなく英文を書いている訳ではないので，生徒よりも楽しく取り組むことができるだろう。

3. コミュニカティブ・テスティングを作る

「コミュニカティブ・テスティング」における問題作りは，創造的な作業である。そして，この作業を成功させるには，日々のさまざまな努力が重要である。まず，いいタスクを思いつくには，「生徒が普段英語でどんなタスクをしているか」ということを常に意識していなければならない。また，「英語」での言語活動に限らず，「日本語」での言語活動も視野に入れておくべきだろう。その意味では，生徒の「生活全般」にアンテナを張っておく必要がある。

また，本当の意味でのおもしろい，コミュニカティブな問題を作るためには，問題作成者としての教師自身が，日常的に英語をコミュニケーションのために使っている必要がある。授業のためだけでなく，日頃から自分自身のために，英語を読んだり，聞いたり，話したり，書いたりしていることが重要である。英語のレシピを読んで実際に料理をしたとか，誰かに手紙を書いて返事をもらったというような経験が決定的に大事なのである。こうしたオーセンティックな英語経験を持たないと，本物らしい英語を書いたり話したりすることはできないし，いいタスクも思いつかない。

最後に，2006 年度の私のゼミでさまざまなライティング・タスクを試みてみたので，それらを紹介する。オーストラリアの博物館や水族館にメールを出して，質問への回答をもらったり，カナダのホテルにオーロラ・ツアーについての質問をして，返事をもらったりした学生がいた。インターネットの質問コーナーに質問を出した学生は，たくさんの人から回答をもらった。英語学習のためのいいウェブサイトに関する質問には，“you seem to be pretty well at it already”などという返事をもらったが，きっと嬉しかったに違いない。また，学生の中には，書いた文章が曖昧であったために，相手から質問の意図を確認されたものもいた。これなどは，教室の中で単に文法的な誤りを指摘されるより，はるかに文法的な正確さの重要性に気づかせてくれる体験であっただろう。

こうして実際に英語を書いて誰かに送ることで，相手から返事をもらうことができる。これは英語を学ぶものが（生徒のみならず教師も）共有する喜びであろう。こうした喜びの経験が，コミュニカティブなテスト作りにつながっていくのである。

もちろん，ネットの向こうには現実の世界があるので，生徒にこうした活動をやらせる場合には，トラブルに巻き込まれないように十分注意しておく必要がある。また，相手によっては何度メールを出しても返事が来ないという「現実」もある。

今回の単行本にも，ここに紹介したような事例がたくさん掲載されている。また，こうしたテスト問題の実例のほかに，スピーキング・テストの実例，さらには言語テストの一般的な知識や，定期テスト作りの原則，テストの項目分析の結果なども入っている。テスト作りの参考にしていただければ幸いである。